

第二言語における否定形の習得過程：
中国人の子どもの事例研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野呂, 幾久子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008330

第二言語における否定形の習得過程

—— 中国人の子どもの事例研究 ——

The Acquisition of Negation in Japanese as a Second Language

—— A Case Study of a Chinese-Speaking Child ——

野呂幾久子
Ikuko NORO

(平成6年10月11日受理)

問 題

幼児の否定表現の習得過程に関しては、これまで、特に英語について多くの研究が行われてきた。(Jespersen (1922), Klima and Bellugi (1966), Bloom (1970), Wode (1981)など) このうち Klima and Bellugi (1966)は、英語児の形態面での発達過程を調べ、概略、次のようにまとめている。⁽¹⁾

Stage 1: S → [{no, not} + Nucleus] または [Nucleus + no]

例 No sit there. No a boy bed.

Stage 2: S → [Nominal + Aux^{neg} + {Predicate, Main Verb}]

Aux^{neg} → {Neg, V^{neg}} Neg → {no, not} V^{neg} → {can't, don't}

例 He no bite you.

Stage 3: S → [Nominal + Aux + {Predicate, Main Verb}]

Aux → T + V^{aux} + (Neg) V^{aux} → {do, M, be}

例 I didn't see something.

すなわち、習得の初期には否定要素“no (not)”は Nucleus(核文)の構造外にあり、それが徐々に核の内部に入り、助動詞などと結合し、形態的構造を完成していくというものである。

一方日本語の否定形の習得過程については、小森・坂野(1988)、小村(1990)、伊藤(1990)などの研究が見られるが、このうち伊藤(1990)は、日本語児の否定形の発達段階について最も明示的に言及し、次のように述べている。

第一段階：文 → [核文 + ナイ]

例 ウタウ ナイ スキ ナイ

第二段階：発達途上形

例 キナイ アラナイ

第三段階：可能の否定形

例 イケラレナイ ヌゲラレナイ

まず第一段階では、幼児は一語または数語文に否定辞「ナイ」をつけて否定文を作る。これについて伊藤は、「英語児の場合と違う点は否定辞の位置が文末であるということだけで、基本的には同じと考えてよかろう。」⁽²⁾と述べている。第二段階では「ナイ」に先行する語に形態音素的な調整が行われるが、成人の言語から見ると誤りと思われる形が出てくる。その後3才前後になると可能否定を使うようになるが、やはり成人の言語から見ると誤りと思われる形が出現する。それが第三段階である。つまり、英語と同様日本語においても、幼児の否定形の習得過程には、まず否定辞「ナイ」が核文の外にあり、核文の内容を否定する段階が存在し、そこから習得が始まるというものである。このような「核文+ナイ」の構造は、藤原(1977)、Clancy(1982)などによっても報告されている。

それでは、第二言語を習得する子どもの場合は、どのような習得過程をたどるのだろうか。現在までの知見では、Wode(1981)が母語の如何にかかわらず、「核文+否定辞」の出現に関する限り、母語と同じ習得過程をたどると主張し、Cook(1991)もこれを支持している。これが正しいとすれば、Klima and Bellugi(1966)の英語児、あるいは伊藤(1990)の日本語児に見られた習得過程と同様、まず第一段階として「核文+否定辞」の構造が現れることになり、目標言語、あるいは第一言語・第二言語の別によらず、否定の形態的発達過程には、少なくとも初期において、ある程度普遍的な道筋があるということになる。しかしながら、Wode(1981)に対してはPark(1979)、Clashen(1983)らの反例の存在も指摘されている⁽³⁾。そこでもし普遍性がないとすれば、それがどのような要因によるものなのかが問題となる。筆者は、第二言語として日本語を習得する中国人年少者の日本語を定期的に観察し、その否定形の習得過程を調べてきた。そこで本稿では、上記の諸問題に答える第一歩として、その結果を特に第一言語の場合と比較しながら記述的に紹介する。

方 法

1 対象児

対象児は、静岡市内に住む中国人の男児(L児とする)1名である。L児は1983年4月22日、中華人民共和国の北京に生まれた。1993年7月21日、父親とともに来日。来日時の年齢は10才3カ月であった。その後9月1日、市立小学校の4年に編入し、現在は5年に在籍中である。L児は来日時および観察開始時において、日本語に関する知識がほとんどなかった。家族は両親とL児の3人である。母親はL児より2年前に来日し、現在静岡大学教育学部大学院生である。L児来日時の日本語能力は、母親が堪能、父親は初級レベルであった。なお来日以来現在まで、家庭では中国語が使われている。

2 方法

原則として1週間に1回、観察者⁽⁴⁾がL児の小学校を訪問し、観察を行った。L児の自然発話および、観察者が否定形の産出を促す質問をすることによって収集した発話をテープ録音し、それを後に文字化したものを分析資料とした。また随時否定形に関する簡単なテストも行った。

3 観察項目

ここで取り上げるのは、陳述否定「～デハナイ」、および述語（動詞・形容詞）否定「～シナイ・～クナイ」である。国文法では否定辞「ナイ」は、名詞（机で（は）ナイ・机じゃナイ）、形容動詞（静かで（は）ナイ・静かじゃナイ）においては形容詞に、形容詞（大きくナイ）、動詞（行かナイ）においては打消（否定）の助動詞に分類されているが、本稿は「ナイ」の品詞としての位置付けについて述べるものではないので、ここでは両者を区別せず、否定辞「ナイ」と四品詞（名詞・形容動詞・形容詞・動詞）との共起関係に注目することにする。（なお形容動詞については諸説あるが、ここでは橋本（1935）にもとづき、形容動詞を一つの品詞とした。）

4 観察期間

今回の分析では、観察開始時（1993年9月16日）から1994年8月25日までの45回分の観察記録を資料とした。L児の日本滞在2カ月目（10才4カ月）から13カ月目（11才5カ月）までの約12カ月間である。なお、1回の録音時間は45分から90分、平均60分であった。⁽⁵⁾

結 果

図1から図4は、各品詞で観察された否定形の種類別出現率を、滞在期間ごとにグラフで表したものである。縦軸が出現率、横軸が滞在期間を表す。なお滞在期間は4期に分け⁽⁶⁾、滞在2カ月目から4カ月目までを第1期、5カ月目から7カ月目までを第2期、8カ月目から10カ月目までを第3期、11カ月目から13カ月目までを第4期とした。なお本稿の最後に、付表1から4として、L児の発話に観察された否定形の出現数、正用数、誤用数、および誤用の種類を、滞在期間ごとにまとめたものを示した。

1 名詞

<発話例>

「～じゃナイ」：フクじゃナイ	* 3 : 2
「ナイ」：センセイ イマ ヨンジュッサイクライカナ・・・	
ナイネー（40才くらいじゃないね）	8 : 4
「～ちがウ」：エミチャン チガウ（えみちゃんじゃない）	8 : 2

(*日本滞在3カ月2週目を意味する)

名詞では、滞在3カ月目に正用形「～じゃナイ」が初出し、その後観察期間全体を通じて高い出現率で観察されている。名詞否定形の誤用は四つの品詞の中で最も少なく、「ナイ」が8カ月目に1例、「～ちがウ」が3カ月目、7カ月目、8カ月目にそれぞれ3例、2例、1例見られるだけである。第4期になると誤用が1例も観察されず、L児の名詞否定形の場合、滞在11カ月目までに習得が完了したものと考えられる。

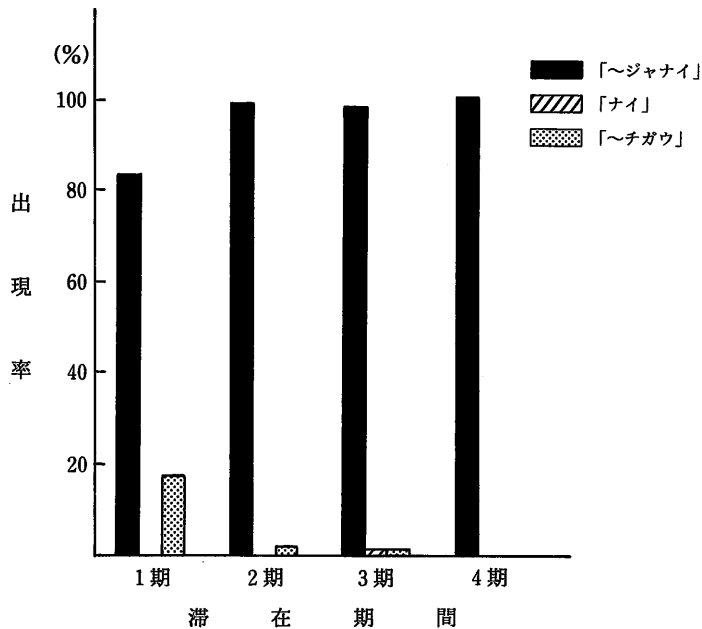


図1 名 詞

2 形容動詞

<発話例>

「～ジャナイ」: スキジャナイ	2 : 5
「核文+ナイ」: ダイジョウブナイ (大丈夫じゃない)	7 : 4
「～クナイ」: キラクナイ (嫌いじゃない)	5 : 2
「その他」: ヘンナジャナイ (変じゃない)	9 : 1

形容動詞でも正用形「～ジャナイ」が滞在2カ月目に初出し、第1期の出現率は100%であった。しかし第2期(5カ月目)になると誤用の「～クナイ」が現れ、13カ月目まで続いた。この「～クナイ」は出現率が比較的高く(第2期22.7%、第3期20.8%、第4期30.0%)、上記の発話例の語彙の他、

ヒマクナイ・ヘタクナイ(5:3)、タイヘンクナイ(6:2)、
 キレイクナイ(8:4)、キレクナイ(10:4)

など、複数の語彙について観察されている。一方「～ジャナイ」は、「～クナイ」の出現と同時にやや出現率が低下したものの、観察期間全体を通じて70%以上と、高い頻度で観察されている。つまり形容動詞否定形の場合、まず「～ジャナイ」が出現し、3カ月遅れて「～クナイ」が現れ、13カ月目までの9カ月間共存していたことになる。

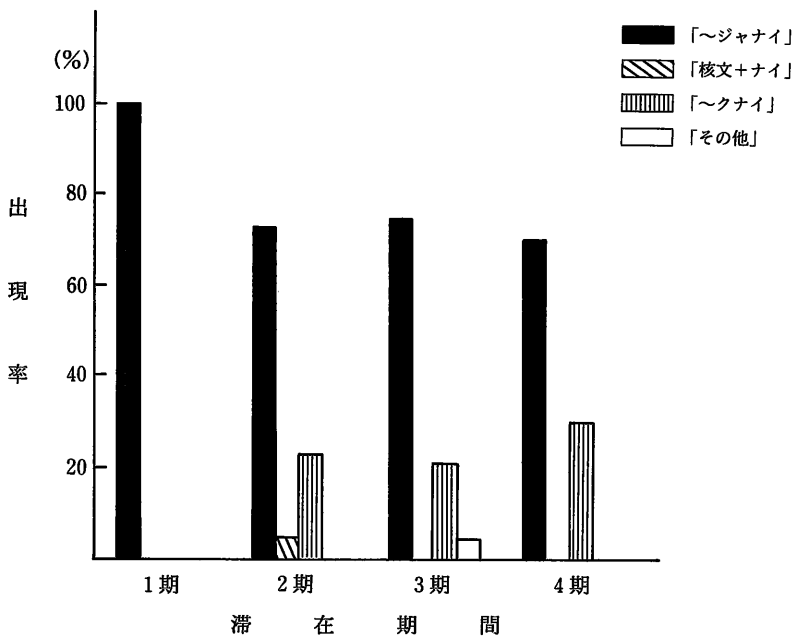


図2 形容動詞

3 形容詞

<発話例>

「～クナイ」: サビシクナイ	2 : 3
「ナイ」: (観察者の「苦しかった?」に対して)	
ナイ (苦しくなかった)	3 : 3
「～ジャンナイ」: ヒクイジャンナイ (低くない)	9 : 3
「～チガウ」: ツメタイチガウ (冷たくない)	3 : 2
「その他」: イイキモチガナイ (気持ちよくない)	10 : 1

形容詞の正用形は「～クナイ」であるが、これは2カ月目に初出している。しかし同月に「～ジャンナイ」も観察されており(オモシロイジャンナイ 2 : 3)、第1期には20%近い出現率となっている。「～ジャンナイ」は上記の発話例の他に、

 イタイジャンナイ (4 : 2)、トオイジャンナイ (6 : 4)、
 オオキイジャンナイ (8 : 3)、アブナイジャンナイ (12 : 3)

など多様な語について観察されている。第2期以降「～ジャンナイ」の出現率は次第に低下し、第4期はわずか3.1%であった。一方「～クナイ」は第1期は68.2%であったが、第2期以降は80%以上、特に第4期は90%を越える出現率となっている。ゆえに形容詞の場合、正用形「～クナイ」と誤用形の「～ジャンナイ」がほぼ同時期に出現し、観察の初期には共存していたが、徐々に正用形だけが使われるようになっていったと考えられる。

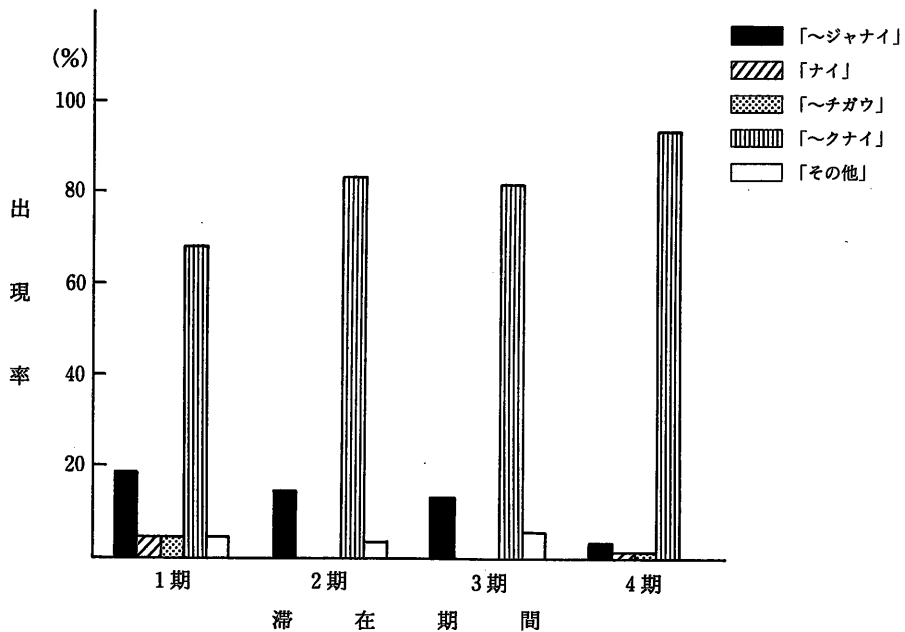


図3 形容詞

4 動詞

<発話例>

「V型」: タベナイ	3 : 1
「可能動詞の否定形」: アソベナイ	5 : 5
「ナイ」: (観察者の「その時まだ日本に来てないか。」に対して) ソウソウ ナイ (来てない)	4 : 3
「核文+ナイ」: ハナスナイ (話さない)	6 : 4
「～ジャナイ」: オトシタジャナイ (落とさなかった)	12 : 4
「～クナイ」: キンチョウクナイ (緊張しない)	6 : 2
「V*型」: カカナイ (買わない) ウゴケナイ (動かない)	9 : 2 7 : 4
「その他」: ハナサナイ (話しかけない)	9 : 4

動詞否定の場合、第1期において最も高い頻度で出現したのが一語文の「ナイ」である(72.5%)。これに対し正用形「V型」は10%しか出現しなかった。しかし第2期になると逆転し、「ナイ」は2.9%に低下、「V型」は78.5%と高い出現率になっている。この時期に観察された他の誤用としては「核文+ナイ」がある。「核文+ナイ」は第2期においてのみ観察され、出現率は4.4%と低い。動詞以外には形容動詞に1例(ダイジョウブナイ 7 : 4)観察されているだけであることから、第1期の「ナイ」の高い出現率と並んで、動詞否定形習得過程の一つの特徴と言える。第3期以後は「V型」が約90%と、動詞否定形のほとんどを占めるよう

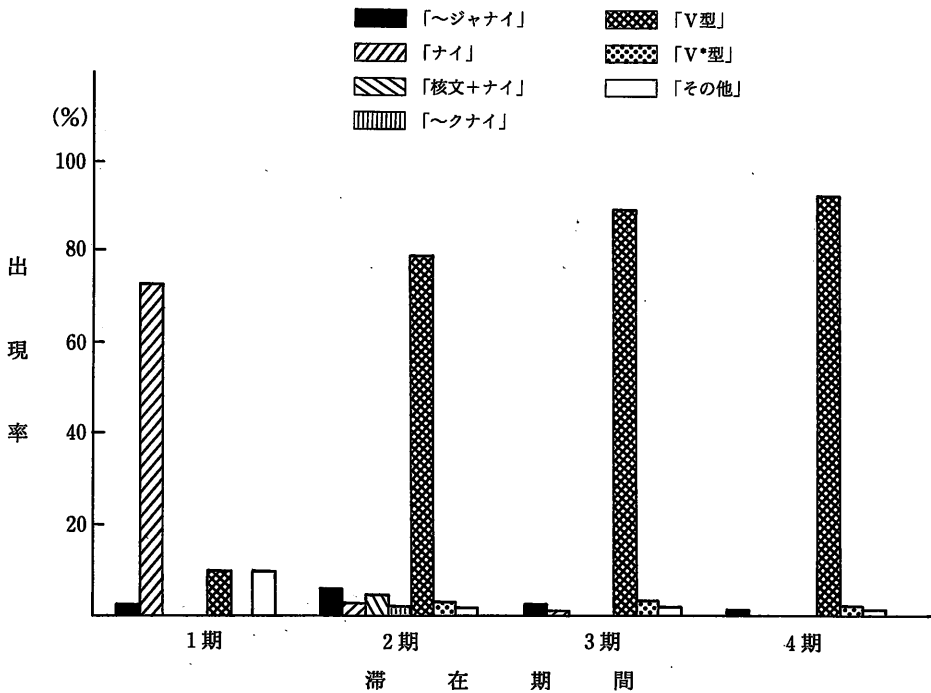


図4 動 詞

注1 「V型」とは、五段活用・上一段活用・下一段活用・カ行変格活用・サ行変格活用を意味する。

注2 「V*型」とは、「V型」ではあるが、誤った形態または発音で出現したものを意味する。

になり、同時に誤用の割合は下がっている。誤用の中で全観察期間を通じて出現したのは「～ジャナイ」である。これは名詞、形容動詞、形容詞に比べると出現率は低いが、滞在4カ月目から13カ月目まで、10カ月間にわたって観察されている。なお可能動詞の否定形は、第1期（デキナイ 3：1）から出現している。

以上、L児の否定形習得に見られた品詞別結果をまとめると、次のようになる。

- (1) 名詞では観察期間全体を通じて、主に正用形「～ジャナイ」が使われた。
- (2) 形容動詞では、第1期には正用形「～ジャナイ」だけが使われたが、第2期に「～クナイ」が出現し、その後両者が混在して使用された。
- (3) 形容詞では、「～ジャナイ」と正用形「～クナイ」が同時期に出現し、第3期頃まで混在して使用されたが、その後主に「～クナイ」が使われるようになった。
- (4) 動詞では、第1期には一語文の「ナイ」が使われたが、第2期以降正用形「V型」が多く使われるようになった。その他「～ジャナイ」と「核文+ナイ」は出現率としては低いが、「～ジャナイ」は10カ月間、「核文+ナイ」は第2期に観察されている。

考 察

以上の結果を伊藤(1990)の第一言語における否定形の習得過程と比較すると、特に習得の初期段階で異なりが見られた。伊藤(1990)で第一言語における否定形習得過程の第一段階とされた「核文+ナイ」は、L児の名詞、形容動詞、形容詞ではほとんど観察されなかった。一方動詞においては、「核文+ナイ」は5カ月目に初出し、7カ月目まで3カ月間続き、8カ月目までに消失している。しかしこの間の出現率は4.4%と低く、また出現数9例のうち、「クルナイ(来ない)」が3例、「ノムナイ(飲まない)」が2例、「ハナスナイ(話さない)」が3例、「マガルナイ(曲がらない)」が1例と、4種類の語彙においてしか観察されていないことから、動詞否定形において「核文+ナイ」の出現は確認されたものの、これを習得の一つの確立した段階と見做すことは難しいと思われる。よってL児の観察結果に関して言えば、伊藤(1990)の第一言語における習得過程とは異なり、「核文+ナイ」を習得の第一段階と認めることはできなかった。これはWode(1981)やCook(1991)の「核文+否定辞」の普遍性を否定する結果を意味している。

それでは、L児と伊藤(1990)の日本語児やKlima and Bellugi(1966)の英語児の母語習得との相違点は、何に起因するものなのだろうか。まず英語児の場合、可能性として考えられるのが、英語の“no (not)”と日本語の「ナイ」の違いである。村田(1984)が述べているように、日本語においては英語とは異なり、「ナイ」が唯一の否定辞ではない。日本語では「イヤ」(拒否)、「ダメ」(禁止)、「ナイ」(非存在)、「チガウ」(否認)などの否定の言語形式が、否定の意味に応じて使われている。そこで英語で[{no, not}+Nucleus]または[Nucleus+no]で表される「核文+否定辞」の構造は、日本語の場合「核文+イヤ」、「核文+ダメ」「核文+ナイ」、「核文+チガウ」など、複数の形式があり得ることになる。実際今回のL児の結果でも、「核文+チガウ」は名詞の3カ月目、7カ月目、8カ月目で、形容詞では3カ月目、13カ月目に観察されている。(また今回は「拒否」の意味の否定を取り上げなかったが、発話資料の中では「核文+ダメ」も観察されている。)このように英語の[{no, not}+Nucleus]または[Nucleus+no]と日本語の「核文+ナイ」がイコールではなかったことが、Klima and Bellugi(1966)の結果とL児の結果の相違点の一つの要因であったとも考えられる。しかしこれについては、「ナイ」以外の否定の統語的分布をさらに分析した上で検討する必要がある。

また伊藤(1990)における第一言語の場合との相違については、一つの可能性として、L児の年齢による統語カテゴリーの認知が考えられる。村田(1984)によると幼い子どもでも、品詞概念は文概念が形成される以前にある程度備わっているという。L児の場合、観察を開始した時点で10才3カ月であったことから、少なくとも中国語においてはすでに、語の統語素性を十分認知していたはずである。そこで日本語で否定形を作る上でも、「核文に『ナイ』をつける」という同一の規則ではなく、品詞ごとにある程度異なる規則を適応しようとした結果、名詞、形容動詞では「～ジャナイ」、形容詞では「～クナイ」「～ジャナイ」、動詞では「ナイ」という、品詞ごとに異なる初期段階が観察されたのではないかと考えられる。

最後に、今回のL児の否定形習得過程に見られた特筆すべき点として、四品詞全てに「～ジャナイ」が出現した点が挙げられる。「～ジャナイ」は正用形である名詞、形容動詞ばかりでなく、

形容詞では滞在2カ月目から12カ月目まで、動詞では出現率は低いが、4カ月目から13カ月目まで観察されている。これは名詞（および形容動詞）否定規則である「～ジャナイ」を、形容詞および動詞に般化した結果と考えられる。これについては、Ross(1972)の連続階層体理論、あるいは寺村(1982)の品詞の連続性からの説明が可能かと考えるが、今後さらに誤用例の分析が必要なので、考察は稿を改め、ここでは示唆するに留める。

さいごに

以上は、第二言語として日本語を習得する中国人のこどもの縦断的研究によって観察された否定形の習得過程である。結果として、Klima and Bellugi (1966) および伊藤 (1990) の第一言語における習得過程とは、特に「核文+ナイ」構造の出現が観察されなかったという点で異なっていた。またこれは、Wode(1981)やCook(1991)の「核文+否定辞」の第二言語習得における普遍性に対して、疑問を投げかける結果ともなった。しかしながらこれは一名という限られたデータからの考察であり、今後さらに多くのサンプルが必要である。また、今回は否定形の種類とその出現頻度という観点から分析したが、今後は実際の誤用例の詳細な分析を通して、その理論的背景を明らかにすることが課題として残されている。

注

- 1) Klima and Bellugi (1966) pp. 192-196
- 2) 伊藤 (1990) p.110
- 3) 小村(1990)p.917
- 4) このデータは、筆者、静岡大学助教授白畑知彦氏および数人の大学院生・大学生が共同で観察を行ったことにより得たものであることを明記しておく。
- 5) 月別の録音時間は種々の事情により一定ではないので下に示す。

L児の月別録音時間(分)

滞在期間	時間(分)	滞在期間	時間(分)
2カ月	270	8カ月	285
3カ月	315	9カ月	270
4カ月	285	10カ月	150
5カ月	225	11カ月	165
6カ月	210	12カ月	240
7カ月	255	13カ月	270

- 6) データを検討した結果、約3カ月ごとに質的な変化が見られたことから、観察期間を3カ月ごと、4期に分けた。

参考文献

- 伊藤克敏 (1990) 『こどものことば—習得と創造』 勁草書房
- 小森早江子・坂野永理 (1988) 「集団テストによる初級文法の習得について」『日本語教育』 62号 pp.126-128
- 小村晶子 (1990) 「幼児の否定表現の発達—形態と用法—」『アジアの言語と一般言語学』三省堂
- 橋本進吉 (1935) 「國語の形容動詞について」『藤岡博士功績記念論文集』岩波書店、pp.389-421
- 藤原与一 (1977) 『幼児の言語表現能力の発達』文化評論出版
- 村田孝次 (1964) 「言語行動の発達IV：一歳児の言語使用語彙に関する縦断的研究」『心理学研究』 35、pp.275-282
- (1984) 『日本の言語発達研究』培風館
- Bloom, L. (1970), *Language Development: Form and function in emerging grammars*. M. I. T. Press, Cambridge, Massachusetts.
- Clahsen, H. (1983), "Some more remarks on the acquisition of German negation", *Journal of Child Language* 10, pp. 465-469
- Clancy, P. M. (1985), "The acquisition of Japanese", In D. I. Slobin (eds.), *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition Volume 1: The Data*. Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, New Jersey. pp. 373-516
- Cook, V. (1991), *Second Language Learning and Language Teaching*. Edward Arnold, London.
- Ito, K. (1981), "Two aspects of negation in child language." In P. S. Dale and D. Ingram (eds.), *Child language: An international perspective*, University of Park Press, Baltimore, pp. 105-114.
- Jespersen, O. (1922), *Language: Its Nature, Development, and Origin*. Allen & Unwin, London.
- Klima, E. S. and Bellugi, U. (1966), "Syntactic regularities in the speech of children", In J. Lyons and R. J. Wales (eds.), *Psycholinguistic Papers*. Edinburgh University Press, Edinburgh, pp. 183-208.
- Park, T. Z. (1979), "Some facts on negation: Wode's four-stage development theory of negation revisited", *Journal of Child Language* 6, pp. 147-151
- Ross, J. R. (1972), "The category squish: Endstation Hauptwort", *CLS* 8, pp. 316-328.
- Wode, H. (1981), *Learning a Second Language*. Narr, Tübingen.

付記 本稿の一部は、1994年9月の中部言語学会において発表したものである。本研究のさまざまな段階で、青木直子氏、伊藤友彦氏、上田功氏、白畑知彦氏に貴重なご助言、ご示唆をいただいた。また岩立志津夫氏には、文献に関してお世話になった。これらの方々に、特記して御礼申し上げます。

付表1 名 詞

滞在 期間 (期)	滞在 期間 (月)	出現 数	正用 数 ～ジャ ナイ	誤用 数	誤用の種類		
					ナイ	～チ ガウ	
第1期	2	-	-	-	-	-	
	3	4	1	3	-	3	
	4	14	14	-	-	-	
	計	18	15	3	-	3	
第2期	5	37	37	-	-	-	
	6	31	31	-	-	-	
	7	64	62	2	-	2	
	計	132	130	2	-	2	
第3期	8	60	58	2	1	1	
	9	22	22	-	-	-	
	10	20	20	-	-	-	
	計	102	100	2	1	1	
第4期	11	18	18	-	-	-	
	12	16	16	-	-	-	
	13	28	28	-	-	-	
	計	62	62	-	-	-	

注1 代名詞を含む。

注2 複数形の名詞の繰り返しは出現数に含めなかった。

(同、形容動詞・形容詞・動詞)

注3 否定以外の、時制・アスペクトなどによる誤用は正用に含めた。

(同、形容動詞・形容詞・動詞)

付表2 形容動詞

滞在 期間 (期)	滞在 期間 (月)	出現 数	正用 数 ～ジャ ナイ	誤用 数	誤用の種類		
					～ ナイ	～ク ナイ	その 他
第1期	2	1	1	-	-	-	
	3	11	11	-	-	-	
	4	-	-	-	-	-	
	計	12	12	-	-	-	
第2期	5	10	7	3	-	3	
	6	3	1	2	-	2	
	7	9	8	1	1	-	
	計	22	16	6	1	5	
第3期	8	10	7	3	-	2	1
	9	11	10	1	-	1	-
	10	3	1	2	-	2	-
	計	24	18	6	-	5	1
第4期	11	5	4	1	-	1	-
	12	1	-	1	-	1	-
	13	4	3	1	-	1	-
	計	10	7	3	-	3	-

付表3 形容詞

滞在 期間 (期)	滞在 期間 (月)	出現 数	正用 数 ～クナ イ	誤用 数	誤用の種類			
					ナイ	～ジ ナイ	～チ ガウ	その 他
第1期	2	2	1	1	-	1	-	-
	3	6	2	4	1	2	1	-
	4	14	12	2	-	1	-	1
	計	22	15	7	1	4	1	1
第2期	5	44	39	5	-	5	-	-
	6	17	14	3	-	3	-	-
	7	32	24	8	-	5	-	3
	計	93	77	16	-	13	-	3
第3期	8	39	25	14	-	10	-	4
	9	42	39	3	-	2	-	1
	10	12	12	-	-	-	-	-
	計	93	76	17	-	12	-	5
第4期	11	21	20	1	-	1	-	-
	12	20	18	2	1	1	-	-
	13	24	23	1	-	-	1	-
	計	65	61	4	1	2	1	-

注1 願望の表現「～タイ」を含めた。

注2 非存在の「いない」は除いた。

付表4 動 詞

滞在 期間 (期)	滞在 期間 (月)	出現数	正用数 V型	誤用数	誤用の種類					
					ナイ	格+ ナイ	~ジロ ナイ	~ク ナイ	V* 型	その 他
第1期	2	5	-	5	5	-	-	-	-	-
	3	21 (2)	3 (2)	18	15	-	-	-	-	3
	4	14 (2)	1	13 (2)	9	-	1	-	-	1
	計	40 (4)	4 (2)	36 (2)	29	-	1	-	-	4
第2期	5	39 (11)	22 (9)	17 (2)	-	6	4	2	2	1
	6	56 (14)	45 (14)	11	5	2	2	1	1	-
	7	110 (19)	94 (17)	16 (2)	1	1	6	-	4	2
	計	205 (44)	161 (40)	44 (4)	6	9	12	3	7	3
第3期	8	193 (43)	171 (39)	22 (4)	-	-	9	-	5	4
	9	139 (18)	122 (16)	17 (2)	2	-	2	-	4	7
	10	143 (21)	131 (19)	12 (2)	1	-	1	-	8	-
	計	475 (82)	424 (74)	51 (8)	3	-	12	-	17	11
第4期	11	120 (13)	110 (12)	10 (1)	-	-	2	-	4	3
	12	154 (27)	139 (19)	15 (8)	-	-	1	-	5	1
	13	238 (59)	224 (47)	14 (12)	-	-	1	-	1	-
	計	512 (99)	473 (78)	39 (21)	-	-	4	-	10	4

注1 ()内の数字は、可能動詞の否定形の出現数を表す。

注2 「わからない」「しらない」は除いた。

注3 非存在の「ナイ」は除いた。